

## 大会伝道の検証 その2 「今後の大会伝道へ向けて」 —現実を見つめつつ大会伝道に仕える次代の伝道者を求めて、祈り、働くために—

大会伝道局書記 齋藤 修

### 1. 大会伝道地選定の推移

大会伝道の検証にあたり、注目すべきことの一つに、大会伝道地の選定の推移があります。大会伝道地の選定は当初の県庁所在地から地域の拠点となる場所へと移って行きました。その際、そのことが新しい大会伝道地の伝道の推進力のひとつとなり得ました。なぜなら、そこには地理的にも近隣に教会があり、地域の教会との交わりができたからです。つまり、そのことにより、伝道協力、経済的支援、修養会の共催などを中会的な交わりの中で行うことができるようになったのです。さらにこれは、大会伝道地の牧師の孤立ばかりかその群れの会員にとっても孤立感を克服する契機となっていました。教会員相互、教会間相互の主にある交わり、互いに仕え、支え合うことの大切さを再確認させられます。

### 2. 次代の伝道者を求める祈り

次に、次代の伝道者の問題があります。現状から予想される将来の牧師不足を思う時、無牧の群れも増えることでしょう。その時、自分が遣わされている群れだけでなく、地域の群れへの協力ということもより多くなってくるのが予想されます。そのような中で近隣教会との協力が益々大きくなっていくことでしょう。しかしその際、同時に長老教会の牧師・中会所属の牧師であるということ、またそのような教会の一員であるという自覚が大会伝道地の牧師の群れの人々一人一人にも一層明確にされてくることでしょう。そこから第

二の課題として、次代の伝道者の問題が出て来るのではないのでしょうか。私たちはこのような全体教会の支えと交わりの中で進められる開拓伝道に仕える伝道者が新たに立てられることを祈り求めたいと思います。交わりの中で共に生きる次代の伝道者が必要です。

### 3. 一切はイエス・キリストに期待される祈り

神は、確かに、祈りの乏しい人、祈らない人、不信仰な人をも顧みて下さいますが、祈って、神との絆をしっかりと持つことを求め、それを喜んで下さいます。また、私たちは聖書によってただ一つの名前イエス・キリストを証し続けることができます。「一切はイエス・キリストによって、そしてイエス・キリストによって一切が期待され」ます。「イエス・キリストは道であり、真理であり、命である」からです。私たちは聖書に聞き、この名に固着することによって、イエス・キリストの証人として真実に生きる自由へと導かれます。その時、「何故人々に福音が、力、癒し、慰めとして届かないか」との問いにも上よりの答えが与えられるでしょう。現実を見つめ、倦まずたゆまず福音を宣べ伝えましょう。大切なことは、「福音は理解しているが、その実践がうまくゆかない」ということではありません。「福音を知らされて生きるとは、自分にできることは何でもする」ということです。大会伝道局の働きをいつも覚え様々な形で支えて下さることに心から感謝いたしております。

# 北海道中会の取り組み

## ～地区制の新たな可能性を求めて～

北海道中会伝道局理事長 久野真一郎

わたしたちの中会は第62回定期中会(2013年)を期して地区制をスタートさせました。地区制が目指したことは次のようなことです。(1)各地域が必要に応じて研修会や修養会を開催し、また中会全体の集会とも連携を図って地域と中会全体を活性化していく。(2)地域固有の課題を協議し、今後のビジョンを共有し、向き合うべき課題を克服してゆく。(3)若い世代の減少、牧師不足による今後の無牧師教会の増大の懸念、次世代への信仰継承という緊急かつ重要な課題に各地区と中会とで取り組んでゆく。(4)無牧師の教会や伝道所に対する地域を中心とした応援態勢および経済的支援の試み。(5)北海道中会で養われた約60年の歴史と伝統を重視しつつ、北海道中会70年、80年、100年に向けて中会のより良いあり方や地域の宣教協力を模索し続けること。

3年目を迎えた地区制ですが、道北・空知、道東、道南、道央の各地区の内、道央地区以外は教会間の距離が遠く、特に道北・空知地区の場合地区全体の集会を企画することは容易ではありません。しかし今年に入って一つの地区としてのつながりを強めるための協議が重ねられ、「道北空知地区修養会・研修会委員会」が設置されました(8月)。11月の集会開催を目指しています。伝道局としては地区の活性化を願い「地区集会補助費」という支出項目を設けて、このような動きを支援してきました。その他の地区の状況ですが、従来からの長老研修会や修養会を充実させているところ、また道央地区のように新たに地区修養会を始めたところもあります。これまで中会連合婦人会が行ってきた地区修養会の動きを継承すると共に、さらに宣教の諸課題に対して地区を挙げて取り組んでいくことが出来れば、生きた共同体としての実質を伴う中会に近づくに違いありません。さて以上のような中会の歩みの中で去る8月24日(月)～25日(火)、札幌北一条教会において

本年度の伝道協議会が行われました。主題は「教会の新しい形をさぐる—私たちは伝道のために何ができるか—」です。河野美文教師による「改革的教会形成と長老職」、筆者の「地区制の新たな可能性を広げるために—持続可能な応援の形と教会再編成の試み—」と題する二つの発題を受けて、グループ協議および全体協議がなされました。河野先生はD.ブローシュの著書「教会の改革的形成」に依って、教会の施策が実を結ぶためには信仰者の霊性と敬虔の回復が必要であると語られ、教会の内的な改革を訴えられたように思います。また協議では発題で触れられた小児洗礼や長老職のあり方について発言が集中しました。教会の基本的な営みが教会形成の要であることが確認されたと言えるでしょう。

一方筆者の発題は、教職の絶対数が不足している現実を踏まえ、持続可能な応援の形とは何か、礼拝の場を確保し教職を迎えるための教会の新しい形とは何かについての試案でした。それぞれの群れにとって差し迫った課題でもあり、慎重な扱いが必要であることは当然ですが、何れの地区も、何れの群れも既成の壁を打ち破ることが求められるでしょうし、互いの協力関係を極めることがぜひ必要ですから、まさに地区制の真価が問われることになると考えています。現在中会では常置委員会と伝道局とで教会の新しい形を検討する作業を進めており、次期中会での提言を目指しています。中会の宣教の可能性を広げることにつながることを切に願っている次第です。



# 東京中会伝道局の取り組み

東京中会伝道局理事長 富永憲司

東京中会伝道局の目的は、中会内における伝道事業の推進にあります。その目的達成のために、牧師と長老を合わせて6名の理事が中会によって選出され、二か月に一回の割合で理事会を開催して、以下の5つの活動を行っています。それらを箇条書きにすると、1) 中会内30教会・17伝道所の伝道応援、2) 伝道に関する調査研究、3) 開拓伝道計画とその経営、4) 伝道に伴う財務処理、そして5) 大会伝道局と連絡協力しつつ、日本における伝道にお仕えしていくということです。

以上の諸奉仕の内、5)の大会伝道局との連絡協力の他に、当伝道局が行っている実質的な活動としては、1)の応援伝道と4)の財務処理が主なものになります。この応援伝道というのは、諸教会・伝道所の伝道活動一般、特に伝道集会を行う際のその伝道計画を把握し、中会内にお知らせして協力を仰いだり、財政的にそれらの諸集会を援助したりするという支援活動です。もちろん、これに加えて、細かなことをいうと、中会交付金とともに伝道所に対する毎月の支援金をねん出するために維持献金や特別献金を募金して各伝道所にお送りしたり、教会・伝道所の歩みを共有し、必要な支援をさせていただくための問安活動などがあります。

また、このところは二年に一回の割合ですが、「中会伝道協議会」を開催し中会伝道ということに関して、全体の知恵を集めたり、今後の中会の伝道の歩みを検討したりしています。ちなみに、昨年度は「伝道所と共に歩む中会」と題して協議し、中会全体で17伝道所を人的、財的に応援する協力支援体制に関して協議しました。

その他、「東京中会伝道局たより」を発行したり、「東京中会ホームページ」を作成して、広く中会伝道に資する活動もあります。

なお、財務関係で付け加えるのは、牧師退職謝儀援助費などを用意して、伝道所に支給（昨年度は6伝道所）したりする活動も伝道局の働きです。

さて、こうしてみていくと、伝道局の活動として、上にあげた事業内容の内、3)の新たな開拓伝道とその経営ということは、ここ十数年行うことができていないことに気づきます。確かに、伝道の大事な働きは教会を生み出していくことです。それができていないということは、伝道の停滞や怠慢と言われても仕方がありません。しかし、実際問題、30教会で17伝道所を支える体制を維持するだけでも大変な状態であり、しかも現時点で6つの教会・伝道所（鎌倉栄光教会、小山教会、世田谷千歳教会、西経堂伝道所、金目伝道所、福島伝道所）が無牧師の状態に置かれているという状況ですので、新しい開拓伝道に取り組む機運にないというのが実情なのです。

最後に、2)の伝道に関する調査報告に関して述べるなら、今年度の中会において、伝道所に関して研究して欲しいとの意見が出されましたので、今年度はそれに取り組むことにしています。具体的には、まずは10月の理事会に講師をお招きし、日本キリスト教会の歴史において伝道所とはどのようなものであり、いかなる歩みを為してきたか、今後は、というようなことを聴き、協議する予定となっています。

このような伝道所に関する研究依頼の背後には、1995年憲法において教会が教会と伝道所と規定されて20年経過した現在、教会と伝道所を区別する基準や根拠があいまいになっているのではないかとの現実感覚があると理解しています。つまり、どこの教会でも伝道所でも一人の牧師が常駐し、しかも教会と伝道所の人的、財政的な差異があまりなくなってきた、あるいは逆転してもいるケースもあるというような現状の中で、この区別をどう考えるのかということでしょう。難しい問題であり、根本的には憲法に関わる大会的課題ですが、東京中会としてもこの問題に取り組みながら、日本キリスト教会の教会や伝道に関して資することができるなら幸いだと思えます。

# 大会応援伝道の報告 加西伝道所

加西伝道所委員 池水千枝 植山直子

2013年11月、全国の皆様のご支援により、待望の新会堂が与えられ、あれから1年半後の2015年5月31日、宇田達夫牧師（稲田堤伝道所）をお招きして加西伝道所初の大会応援伝道を実施しました。私たちの教会では、今、婦人・壮年会（合同の会）で宇田牧師の著書「主の証人たち」（日本キリスト教会教育委員会）をテキストに学びをしていますが、会員、求道者の中から「ぜひ宇田先生をお呼びしたい」との声があり、今回、特別伝道礼拝の講師をお願いすることとなりました。

そのための準備として、新聞折り込みに1万3千枚のチラシを入れ、ポスターを教会前のフェンス・掲示板の他に、教会員の自宅や勤め先（書店）にも貼ってもらいました。また、皆で手分けして、会員の家族や友人、求道者の方々へ90通程チラシとお便りを送りました。

当日は会堂に入りきれないくらい大勢の方々がいらして下さり、大人47名子ども7名もの出席者が与えられました。ポスターやチラシのかいもあって新来会者は6名あり、その内1名は今も続けて礼拝に出席されています。

この日の説教は、ローマの信徒への手紙13章11～14節から「この時代の苦悩～朝の予感～」と題するお話でした。

「私たちは自分の中にある闇に思い悩み、その闇から抜け出したい、長い夜から目覚めたいと思いつつも目覚められない苦悩を持っている。しかし夜が深く更けていくのは朝の光が近づいていることを意味しており、目覚める時は一人一人違って、神を愛することにより必ず朝が来るのだ」という力強い御言葉が語られ、多くの方々が「慰めと希望を与えられた」と話していました。

礼拝後は、今春同志社女子大学音楽科に入学した女子青年が「ちいさなかごに」（讃美歌二編26番）と童謡を歌って下さり、和やかな交わりの時が与えられました。午後の会には30名程の出席

者があり、「教会の個性と伝統の豊かさ」というテーマで宇田達夫牧師がこれまでに会ってこられた先生たちとの心温まるエピソードや、ご自身が病に倒れて与えられた気づき、またこれからの教会の姿について考えることなどを自由に語って頂き、その後、懇談の時を持ちました。

今回、大会伝道局の応援を受けて、このように実り豊かな集会を持つことが出来たことを、会員一同心から感謝しております。

私たちの教会は、兵庫県の片隅にある小さな群れですが、これからも神と隣人に仕え、全ての人に開かれた温かい教会として、主の愛と恵みを伝え続けていくことが出来るよう、主の導きを祈りつつ歩んで行きたいと思っております。



## 今年度後半の大会応援伝道

札幌手稲前田伝道所 8月23日（日）

講師 崔炳一（チェ・ピョンイル）

（長崎伝道所牧師）（実施済み）

雲雀ヶ丘伝道所 10月25日（日）

講師 鈴木攻平（近畿中会教師）

小山教会・下館伝道所（合同で実施）

10月25日（日）午前 下館伝道所

午後 小山教会

講師 齋藤修（磐田西教会牧師）

つくばひたち野伝道所

11月7日（土）～8日（日）

講師 鈴木攻平（近畿中会教師）